

第97号

1985年5月25日

内容

管理社会のライフ・スタイルを
考える……………1~2
第131回大学共同セミナー……………2~5
法人ニュース……………6
教育プログラム白書……………7~8
私とセミナー・ハウス……………8~9
業務白書……………9~10
事業部だより……………10~11
わたしたちの合宿……………11
利用状況……………11~12

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
〈所在地〉
東京都八王子市下柚木(☎192-03)
電話 0426-76-8511~3
振替口座 東京 5-7 4 5 9 0 番
編集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人 中川秀恭
発行人 西田亀久夫
製作 中央公論事業出版

現代の日本は管理社会であるとは、よく言われることである。だが、管理社会とはいったいどのような社会なのだろうか。それは、単に品質管理とか財産管理といった意味での管理が普及している社会でないことは言うまでもない。またそれは、政治権力が上から人々を強権的に管理する単純な政治体制のことでもない。

ここでいう「管理」とは、人間をその個性や総体においてとらえるのでなく、産業の効率や合理性本位の社会秩序の維持という特定の目的に資するために、人間を抽象化し、序列化して、モノや資源として操作したり調達することであり、さらにまたそのような生産価値を支える人間を再生産する営みでもある。そうした意味での管理がゆきわたった社会を管理社会という。このセミナーで私たちが取り組むのは、今日の日本社会に体質化されてきた、このような意味の管理社会である。

日本に管理社会が成立したのはいつ頃からだろうか。管理社会への助走路は、一九五五年に始まる技術革新を起点とする、高度経済成長に伴う産業社会化の過程である。よく知られているように、高度経済成長は、一九六〇年代前半ば東京オリンピックの頃ピークに達し、六〇年代後半に公害をはじめとするさまざまな社会的矛盾を噴出させ、一九七三年の第一次石油ショックで終幕となり、以降は安定成長に転じる。大筋を言えば、管理社会は、一九六〇年代から七〇年代はじめまでの高度経済成長期にその基盤をつくり、七〇年代後半の「豊かな社会」のノーマル

シの状態の中で、姿をはっきり現わし始めた、と言えるだろう。管理社会化の潮流に人々がまぎこまれていくときに梃子の役目な果たしたイデオロギーは生産力ナショナリズム、およびそれに伴う選別排除のナショナリズムだった。生産力の上昇が高度経済成長と「豊かな社会」を保障するオルマイティと見なされ、GNP神話が増すにつれて、その生産力を増すために、また石油ショックのような危機にこそいっそう生産力を維持するために、効率と機能的合理性の

原則によって人間と組織を再編成していく。しかもこの原則による再組織化は企業や官僚制のような職能集団だけでなく、消費の領域や、学校・家庭のような再生産装置にまで及んだ。こうして管理社会は社会の全領域にほとんど体質化されて現われる。

他方、効率と機能的合理性の原則が貫徹されれば、生産力ナショナリズムを推進するテクノクラートを選抜して養成し、大衆を「一望監視方式」の空間とプログラム化され既決化された時間に囲い込み、産業社会の効率と合理性の原

第131回大学共同セミナー 主題に触れて



立教大学法学部教授
栗原 彬

管理社会のライフ・スタイルを 考える

原則によって人間と組織を再編成していく。しかもこの原則による再組織化は企業や官僚制のような職能集団だけでなく、消費の領域や、学校・家庭のような再生産装置にまで及んだ。こうして管理社会は社会の全領域にほとんど体質化されて現われる。

他方、効率と機能的合理性の原則が貫徹されれば、生産力ナショナリズムを推進するテクノクラートを選抜して養成し、大衆を「一望監視方式」の空間とプログラム化され既決化された時間に囲い込み、産業社会の効率と合理性の原

則にとって妨げになったり「お荷物」になる存在は「科学的」な選別を施して「専門的」な名づけを施し、「専門組織」に隔離して管理することになる。昔、共同体の中で許されていた子ども「柿ドロボー」は、今日では「非行」と呼ばれる。子どものはみだし行動を「非行」と見る心性は、ナショナルなものになっていって、よい。偏差値神話の行き着くところが、選別排除のナショナリズムが強まり、各専門組織の管理が増幅される。

排除のナショナリズムに促されて、産業社会の内側から管理社会が生み出されてくる。少なくとも四つの社会構成原理が働いている。これら四つの構成原理は、産業社会の効率と合理性の原則が日本社会の共同性の枠組や政治文化と結びついて形成されたものであって、日本型の管理社会を存立させる四つの柱となっている。

四つの社会構成原理の第一は、中央集権化の原理。もろもろの組織の管理中枢が中央に集結して管理センターを構成するばかりでなく、その意思決定が下降する出力

の回路、および人々の欲求が吸い上げられていく入力回路は、中央集権的なシステムとして働く。

第二は、社会の中間領域への管理のゆだねられ。管理が専門制度に移だねられて、人々は教育、医療、資源、原子力、市場、労務、交通等、さまざまな管理体制の網の目に囲い込まれていく。

第三は、産業の技術規則あるいは合理化の原理。資本と労働と情報と効果的に使用し、有効需要の創出に働きかける管理が人々に内面化されて、実社会型の自主規制のメカニズム、ホモ・エコノミクスの「自発的服従」が生まれる。

第四は、都市型社会の再共同化。つまり家族の生活機能とサービス産業とが深いつながりをもつことによって、草の根の管理的協調を生み出すことである。

こうして四つの構成原理が連鎖的に働くとき、管理社会の立体的な構造が姿を現わす。底辺には草の根の管理を育てる家族、関係を疎外された家庭があつて、その上に管理―被管理関係を再生産する学校がある。そして学校を卒業すると管理の源泉とも言える組織、労務管理・生産管理以上に、日常の生活が全般的に管理化した会社があつて、さらにその上に官僚制があつて、その官僚と企業エリートと保守政党が協同的な意思決定を行い、利益配分を司り、ゆるい管理センターをつくる、という構図が成り立っている。

要するに、管理社会では、管理―被管理関係が、労働の場にとどまらず、教育、健康、育児、余暇

(2 ページ 4 段めに つづく)

第131回 大学共同セミナー

主題 管理社会のライフ・スタイルを考える

期日 85年3月15日 17日

ゲスト講演

非・常民の思想

作家 五木寛之氏

セクション演習

A 時間の管理

信州大学助教授 山本哲士氏

B からだとことばの気づき

竹内演劇研究所長 竹内敏晴氏

C エネルギーと環境の管理

稀少性の論理を超える試み
一橋大学助教授 室田 武氏

D 管理の管理

法政大学助教授 田中義久氏

運営委員

立教大学助教授 栗原 彬氏

参加学生 89名(内女子33名)

立教(9)、東京(7)、早稲田

(6)、筑波・都留文科・慶応義塾

(各5)、信州(4)、跡見学園女子

ICU・中央・東京女子(各3)、

東京農工・一橋・東京都立(各

2)、北海道・東北・埼玉・千葉・

東京医科歯科・東京外国語・お茶

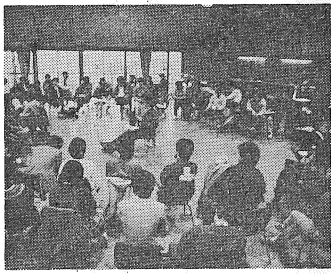
水女子・電気通信・横浜国立・

横浜市立・青山学院・成蹊・専

修・津田塾・東京理科・東洋・武

蔵・明治・和光・愛知(各1)、

その他(4)、合計37校。



全体集会—“円形劇場”の出現

「管理社会」の仕組を客観的に捉えると同時に、私たち自身のものの考え方、ことば、あるいは身体の中にある管理社会的なものを自覚化しようとするのが今回のセミナーの主眼である。共同セミナー委員・栗原彬氏が企画・運営の両面で多大の労をとられたが、このセミナーの詳しい主旨は、氏の「主題に触れて」(フロントページ掲載)を参照されたい。

学生の反響は予想に違わず大きく、応募者は一〇〇名を超えたが、プログラムの適正な運営を図るため、別記のように八九名を受け入れた。

◇

プログラムの冒頭で行われた先栗原氏の主題解題につづき、作家・五木寛之氏のゲスト講演「非・常民の思想」が聴衆の熱い期待の中で開始された。示唆に富む題材が随所にちりばめられた氏のお話にて、参加者は大いに想像力をかき立てられたようであった(要旨は次ページに別掲)。

夕食後は、指導教授を中心に各セミナー室に分かれての演習が行われた。山本哲士氏のセクションでは、管理された時間の中で、

「時間を食べながら」くらししている私たちの時間のリズムが反省され、「自分の時間」を回復する可能性が模索される。竹内敏晴氏は、からだのことばの中に気づかぬうちに浸み込んでいる管理をこぼからずではなく、実際にからだを使いながら「互いに気づきあう」試みをする。室田武氏のセクションでは、化石燃料を瞬時に消費することを正当化する「稀少性の論理」を、水車、雑木林という観点からスライドや映画を觀賞しながら相対化する。田中義久氏は、管理化の進行を日々の生活過程の中に見られる「均質化」と「差異化」としておさえ、これを社会学と政治学の接点から客観的に解明する。

◇

第二日午前中は各セクションに分かれて演習が続けられた。午後には、竹内氏の指導のもと全員がブレインド・ウォーク・ゲームに参加した。このゲームは自分の身体の中の囚われた領域に気づき、自分の中に眠っている自由のびやかたてそこへ経験をもつこと、そしてそこから得られた身体感覚やイメージをもう一度ことば化する試みである。

自由に二人ずつが組を作り、一人が目をつぶりもう一人が誘導する。起伏に富む、野趣豊かなキャンパスを三〇分交替で歩く。日常のまなざしに支配された世界とは異なる生き生きとした世界が広がる。木々に萌える新芽、落葉の下に隠れた大地のぬくもりなど自然のもつ豊かさに驚かされる。さらに、二人の関係は、管理—被管理の原初的な場面を気

「前ページからつづく」

活動などの日常生活にも浸透している。そのことによって、日常生活の相互性、共同性、いのちの通い合いが破壊され、代りに人間の抽象化、モノ化、操作化が現われる。しかも本来多様であるはずの社会関係がしだいに管理—被管理関係に変質してしまっても、それをごく自然なものと思わせるメカニズムが働いている。疎外の疎外、忘却の忘却、つまり自分が疎外されていることを忘れ去るならば、服従しつつそれを自明と思ひ、幸福とも感じる事態が恒常化する。こうして、管理とは、新しい抑圧の形式であり、新しい支配の形態でもある。

私たちはこうした管理社会の仕組を客観的にとらえる必要がある。だが管理が、価値意識や心性に深く関わるものである限り、制度を変えるだけでは十分でない。管理が私たちの知覚や感覚、発話や身ぶり、日常の慣習行動にもしびこんでいるとすれば、自分自身のもの感じ方、ことば、あるいは身体の中の管理社会的なものを自覚化することが同時に必要ではないだろうか。

竹内敏晴さんから聞いた話を紹介しよう。セラピストが「遊び療法」の一環として障害児と遊んだ。遊び終わったあとで障害児が「ありがとう」を言わなかった。セラピストは「ありがとう」と言いなさい、と教えたが、それでもその子は黙ったままだった。そこでセラピストは、その子の友人を介して、先生に遊んでもらったらお礼を言うものだ、と伝えたのだが、その障害児は頑として

「ありがとう」を言わなかった。なぜこの障害児は「ありがとう」と言えなかったのか。セラピストが遊んで「やっていた」とときには、あえて言えば二人の間は管理と被管理の関係になっている。障害児にとってそれはコミュニケーションになっていないのだ。「遊んであげている」でなく、セラピストがその子と一緒に自分も本当に遊ぶ、いわば肩を並べる行為があつてはじめてその子は開かれていくのではないか。せわしない日々の間に、私たちが意識せずに自分の身体やことばに仕こんでしまった管理をひきはがすことを試みたい。管理社会では、視聴覚は他の知覚・感覚を締め出すほどの優越的地位を占めている。そこで眼の働きと発話を遮蔽してはどうか。身体を動かすゲームやドラマの方法を導入して、自分の身体の中のとらわれた領域にゆき当たったり、自分の中に眠っている自由のびやかな力に出会ったりする経験をもちたい。身体感覚やイメージは、再びことば化する過程へ返されるだろう。こうして、自分の身体とことばが開かれる過程はまた、他者との間に相互性と交信性を経験する過程でもある。この経験はライフ・スタイルの探究に確実につながる。管理社会の構造を理解すると共に、自分の身体、ことば、あるいはライフ・スタイルの検討を通して、「疎外の疎外」を解除し、管理社会を超え出る糸口をつかむ、楽しい実験としてこの共同セミナーを展開したい。

づかせてくれる。事細かな誘導は決してパートナーの自由でのびやかなからだの動きを引き出さない。ゲーム開始直後の不安定な動きはしだいに影をひそめ、また不安と恐怖の気持も解消されて、参加者たちは、ハウスのキャンパス

の自然と各人の内なる自然を交感させることができたようであった。ゲームの効果は、からだから漂う解放感となって現われ、交友館でのティー・タイムは終始なごやかな雰囲気包まれた。

午後の後半、講堂で行われたシンポジウムは、栗原氏の司会で山本、竹内、室田、田中の四氏の発言を中心に展開した。冒頭で前日、五木氏の持参された録音テープに耳を傾けた。氏はこの一月、流民のユートピア小説

とでもいうべき『風の王国』を上梓し話題を呼んでいるが、そのモデルとなったといわれる「山窩」の人々のインスピエューの模様が収録されている(昭和25年ラジオ放送から)。このテープにより風や水のように「流れ」のライフスタ

イルをもつ人々の生き方の一端に触れることができた。次に、シンポジウムの発言を拾ってみよう。

● ゲスト講演要旨 ●



非・常民の思想
作家 五木寛之

納税、兵役、教育は国家による人民管理の三つの柱だが、それに付随して管理は、われわれの日常生活の中で様々な形態をとっている。それは、今さら「管理社会」などと言う必要があるのか、とさえ言いたくなるほどだが、現在では管理が社会の根本原則ではないかと思わされるくらい行き届いている。

しかし、考えようによっては必ずしも管理に逆らう、その殻を破って自由に生きるのが、人間の生のエネルギーの表現とはいき切れない。花田清輝が述べたように、遠心的にどこまでも広がっているというとする生の力(エラン・ヴィタール)と求心的に物事の形を整えてゆこうとする生の力(フラン・ヴィタール)とは、共に同じ人間のエネルギーの在り方だとするのなら、管理と被管理の関係を善と悪、搾取と被搾取、圧政と解放という形でとらえるわけにはいかないだろう。管理する力も、また人

間のエネルギーであり、歴史を作ってきた力なのだろうと、私は考えている。ところで、私はあるきっかけで北陸の白山の麓にあった牛首という村落に興味を持った。江戸時代には牛首川流域の山麓の間に二〇〇三〇軒の集落があり、普段の人口は全部で一〇〇人足らずであったが、冬になると、たくさんの乞食が山を登ってきて、真冬の間だけは一、〇〇〇人を超える人々が集まった。彼らには、その間、袖を織ったりするほかには何もしない。春になり雪が溶けるのと、三々五々山を降りて、北陸や遠くは近江や京都のほうまで出かけて行き、物を貰って歩く。村々では、彼らがやって来て門口に立つと、あらかじめ用意しておいた小銭や米などを与える。

私が不思議に思ったのは、そういう物貰いに対して、なぜ村人がほっとして物をやるのかということだ。貰う側も別にお礼を言わなくてもいい。私はそこに非常に興味を引かれた。さて、柳田国男によれば、常民とは農村に住み、水田耕作を行ない、先祖伝来の風習を守っている人々を指している。彼らは平地に定住して、物を生産する人間たちである。これに対して、たとえば、かつて「山窩」という名前でも

近代では「働かざる者、食うべからず」という諺が示すように、生産者は善であるときれた。その底にあるのは実り多きことを願う思想である。しかし、私には、物を作り出すことによって生じる害もまたあるのではないかと、思われる。一粒の種から一〇〇粒の米を取獲する。できれば、その二倍や三倍もとりたい。それは、一種の手工品のようなものであり、私には生産し蓄積する人間は、自然には人間がとる権利のあるものの何倍も不当にとっていると感じられる。私は、生活レベルを下げる

ことがいいとは必ずしも思わないが、物を作ることを、多く生産すること、豊かな実りの不当さということを考える。一から一〇を作り出すことは、非常に不自然な取奪であり、人間が自然の中で定められたルールを破っているのではないか。一粒から一〇〇粒とれば、

きつと土地はすぐにだめになる。最近流行している「エントロピー」は、このことをよく説明している概念である。日々額に汗して働く農民たちは、表面ではよき農民として誇りを持っていても知られない。しかし、心の底では不当にとることに對するある種の集団的恐れのようなものを抱いているのではないか。牛首から来た乞食に物を与える村人は、そうした恐れを持ち、生産する人間の業や原罪を背負っているのではないかと。彼らにとっては、物を作らず、蓄えもしない人々は、家を捨て出家した人々と同様、聖なる存在である。そういう一種の聖に、合掌し、感謝して自分の蓄えた僅かなものを献げる。それは、生産しない人間に対する生産する人間の賛嘆の言葉であり、その罪多き行為を自覚し、懺悔し、贖罪する「行」なのである。それはまた、働いて食べることを決意した人間の救済への意志の表現であり、彼らは喜捨することによって精神的な安定を得てきたのである。近代では、多く生産し、よく働くことは善であるとされてきた。しかし、多く生産するものは、また多く失うものかも知れない。

「文責・編集者」

▼ 室田武氏

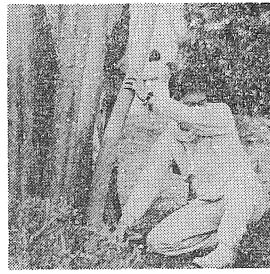
「石油がなくなったら大変だ。今の生活は捨てられない。だから原子力発電が必要だ」という論理が幅をきかせているが、誰も原発が石油の代替エネルギーになるとは考えていない。王様がハダカであることがわかったら、たとえ一人になろうとそれを言い続けることが重要だ」

▼ 竹内敏晴氏

「いま」という瞬間がなく、つねに未来のある目的のための手段になっている。ゲームは確かに快感を伴う心地よい体験であるが、ここに自足している限りは管理社会から抜け出すことはできない。いま自分のからだに何が起きているのか。それは自分にとってどう感じられるのか。からだを通して生きたことを回復することが管理社会を超える第一歩になるだろう」

▼田中義久氏

「現代の文明社会ではひととひととの関係が、ものとももの、役割と役割、かねとかねの関係に自立化して、人格と人格が交響し合うような関係をもてなくなっている。私たちは「もの」と「もの」の関係よりも「ひと」と「ひと」の関係の方を意味的、価値的に優位なものとして位置づけることが必要だ。日常生活のなかで自分が完全燃焼できるものがあれば、ま



大地との対話——ブラインド・ウォークのひとつ

●参加者の感想

●ブラインド・ウォークに
思うこと

東京女子大文学部社会学科四年

渡辺 久美

目を閉じ、視覚による制限を解放して歩く。木に触れ、土に触れ、花の匂いをかぐ……。それによってそれまで見えなかったものが「見えて」くる。木と水道管が区別できなかったことや、水の滴る音を機械の音だと思ってしまったこと等、自分がいかに都市化されているかを思い知らされてしまった。だが、それ以上に「管理されることを当然と思う自分」につき当ってしまったことは、一つの衝撃であった。

ずそれを他者と相互行為させていくことが管理社会を超える橋頭堡になるのではないか」

▼栗原彬氏

「王様はすばらしい着物を着ていらっしゃる、ということばによって本当に着ているように見えてしまう。ことばが私たちの意識を強く縛っている。ことばによって設定された目的は無意識のうちに私たちのからだを支配しているの、生き生きしたことばを話すには、まずからだを起点に考えていくことが必要だ」

以上の発題の後、現代の若者の「シラケ」についての議論があった。「若者は管理社会の中にドップリと浸り、滅私奉公的に働いているかのように見えるが、私たちは醒めた目をもっており、企業から距離をとっている」という

ブラインド・ウォークの一つの目的は、「からだの解放」であったはずだ。そこで求められていることは自主的に行動することである。しかし自分自身について考えてみると、対象に触れてみることで外とのすべての行動をパートナーの誘導に任せてしまっていたような気がする。そこには管理された安全性はあるが、身体の解放・自主的な行動はない。パートナーの誘導(管理・被管理)が意識の底であたりまえに思っている私にとって、パートナーに対する満足は当然のものだったかもしれない。行動の解放といった意味で目的からはずれたにせよ、得たものはやはり大きかった。ブラインド・ウォークにおいて目を閉じている

一人の参加者の発言に対して、竹内氏は「どんなにシラケて、企業に帰属していないと言ってみても、からだのレベルから見れば滅私奉公している。シラケないようにするために自分がしたくないと思うことはしない、ということが必要ではないか」と。

シンポジウムの終わりにある大学の女子学生から「最近、管理の徹底した学園生活の中で相次いで女子学生が孤独の死をとげている」という悲痛な発言があった。管理社会の非人間性に気づいた時、その人は一人取り残されてしまうのだろうか。

「一人取り残されるのは恐ろしいかもしれない。それはいわば解放された恐怖」という哲学上の大問題だ。本当に一人になった時こそ、新しい関係性が見えてくる」と山本氏は示唆した。

人が閉じた空間にいるとすると、そのパートナーは対象をその人に運んでくる者である。パートナーが何を運んでくるか、それは秘かな楽しみであり、また、何を運ぶかは、何を伝えたいという「想い」になる。
時間・空間的に離れた相手に運ぶにはそれなりの方法が必要である。人はそうして何かを語り、文を書き、本をだすのであろう。ブラインド・ウォークを通して、コミュニケーションの原点に触れた思いである。

●共に生きる体験

信州大学文学部文学科四年

早見由喜夫

二日目の夜、演習も終り、ぼく

管理社会を超える糸口は、まず各人が意識のレベルだけでなく、身体レベルでも気づくことにある。が、そのことがいかにむずかしいかをこのシンポジウムはつきつけた。

◇

最終日の全体集会ではセミナーそのものの中に流れていた管理された時間が浮き彫りにされた。

従来のセミナーでは、講堂中央正面に司会者と報告者が並び、他の参加者は扇形に正面を向いて坐る。ところが、講堂に入ると机と椅子が無造作に置かれていたのである。実はBセクションによって意図的に仕組まれたものであった。しばらくすると、誰かの提案で司会者を中心にした円形劇場ができあがり、各セクションの報告は、その舞台で行われることになった。さらに、限られた時間をい

らは明日の全体集会で何をやるかについて、延々と話し込んでいた。ぼくらはずっと竹内敏晴氏によるレッスンを体験してきたのだが、それをただ羅列し説明してもあまり意味がないうちに思われた。なんとかぼくらの体験の一部でも参加者全員に共有してもらいたかった。「話しかけ」のレッスンをやろう、歌をやろうといういろんな提案が出されたが、しかし考えるほどにその困難さが見えてきた。再三の折衷案にもかかわらず、ついに決まらなかった。それほど皆の心は揺れていた。すべては当日その場の状況次第だった。

かに配分し、議事を進めてゆくかについて議論が闘わされたが、そこで望まれていたのは、演習の内容を情報化するのではなく、「共感を呼ぶ」ような発表であった。多くの生き生きとした発言があったが、残念ながら紙面の関係で割愛させていた。セミナー・ハウスでの非日常的な時間から、日常的な場面に立ち返ったときに、参加者はどう自分のライフ・スタイルを形成していくのだろうか。栗原氏は、このセミナーは「教師と学生」という管理型の教育の場ではなく、「同志」として「ともに変わる試み」であったが、ここで共有された原体験をからだごと、と最後に記憶し続けてほしい、と最後に一言。参加者にとって管理社会のライフ・スタイルを考える試みはいまここから始められたといえよう。

にまでなった。またプログラムの時間を無視しようという試みがなされた。たんにプログラムどおりに進むのではない、なんとか自分たちの手になる進行をといていく気があった。参加者は進行している現在にも「管理」の魔の手を敏感に感じとり、なんとかそれを打破したい、そういう思いが感じられた。集会全体が生きて動いていた。どのセクションの発表も、たんなるまとめではない新鮮さがあった。最後にわがセクションの発表。期待のNさんは予想以上の熱弁ぶり。ついに歌うときが来た。最後まで決心がつかず揺れていたぼくは、結局席を立てずじまい。円形劇場で演じ歌う仲間を見ながら、「なんにしるほくはここで彼

△大学共同セミナー体験記▽



開環な環境
ルビキアル
コビ生き
コ係
信州大学教養部助教
山本哲士

大学のキャンパスも、どうやら「灰色の男たち」に占拠されてしまっているようだ。灰色の男たちとは、ミヒヤエル・エンデの『モモ』に登場する、管理社会のメタファーである。

第131回大学共同セミナー「管理社会のライフ・スタイルを考慮する」で『モモ』を徹底して読んだとき、それまで視えずにいた灰色の男たちが、はつきりとどこにいてくれる環境が、セミナー・ハウスにはあった。

わたしは大学院生の頃、メヒコの国際文化資料センターへいき、そこで産業社会批判の思想を学んだ。そこは、「学びたいと欲する者」であれば、誰でも参与することができ。セミナーを開きたい者が告知版に、テーマと希望人数と講義料を掲示する。面白そうなものを選びたいけれど選ぶし、なければ自分から希望をだせばいい。もちろん自分で開いてもいい。人氣がなければ誰もこないだけのことだ。

セミナー・ハウスほど大きくはないが、プールやカフェテリアがあり、南国ののんびりした環境で和気あいあいとそれを「コンビリアル」と形容していた。充実した時をすごす。図書館は、ラ

テンアメリカ研究、産業サービス制度研究(交通・医療・教育)に關してはかなりの資料・文献がそろっていた。世界中から学生・教師・法律家・医者・神父等、実に様々な人があつまり、英・仏・独・西など多言語がとびかっていた。

資料も保証書もカリキュラムもないし、またいらぬ。ただ、スペイン語学習は、上級まで習得する契約を結んだなら、教師はさびしい。一日でも理由なくやすめば、責任がもたない契約は解消される。親愛と敵しき、そして解しき、これがコンビリアルな質だ。強制はない。契約があるだけだ。

セミナー・ハウスで三日間過ごし、わたしは、このセンターのことを思いだした。大学教師を中心にしていう点で、大学離れをしきってはいないが、しかし、大学ではありえないコンビリアルな関係が生きる環境を感じた。学生たちが、まず、学ぶことに意欲と意志をもっている。単位制のもとでの義務的学習ではない。すると、教師は手もちの知識をメッセージとして送るのでなく、学ぶ者たちへの媒介者として関わる。自律・他律の相互関係のバランスがよくとれるのだ。そして、これは大事なことだが、学ぶことへの受講料を、資格を買うためではなく、学ぶ行為それ自体のために払う。それを使うスタッフの人たち、そして講師は、△契約を履行する。

わたしは、年中協同して生活しあう農耕的な慣れあいと監視というのは肌にあわない。やりたい者

たちが、場や手段を使って、狩猟民的・遊牧民的に、ある瞬間、協同してまた散っていく。そんな関係が好きだ。セミナー・ハウスは、そうした場にふさわしい。いろいろ腕をもったくせのある個が集まり、考えや意見を交換し、交流しあう。

『モモ』を読みながら、語らい、踊り、論(あらそい)い、食べ、飲み、耳を傾け、身体を動かし、頭を動かす。そのうち、灰色の男たちの所在を知ったわたしは、ジジやベッポとモモの対関係から、△モモ・カシオペアVの対関係を発見していく。自分ではない自分をそぎおとし、自分である自分を見いだしながら、闇の世界から△時間の花Vを解きほなっていく緒をつかんだようだ。

学ぶことは、どこでもできるようでいなくなかかできない。とても簡単なことであるがゆえに、複雑な産業社会の実効性第一主義は、有効性のないそれを容易に許さない。やはり、ある特別な時間と空間の場を要する。それを活性化するのは、自律共働関係を結びあう自分たち自身だ。わたしたちのセクションは、セミナー終了後も「カシオペアの会」をつくり、何か交流をつづけていくようだ。そのまま何もしないかもしれない。手づくりの刷誌が先日、手もとにとどいた。時おり、遠慮のない電話が気易くかかってくる。

したいことをすればいい。それがいいやなことではなければ、理由をはっきりいってなければいい。規則や集団性に従順であるより、直接の一对一の他者関係を、たいせつにすればよい。拒否を含めて、

らと共に確かに生きてんだ」と、そういう思いで思わず胸が熱くなっていた。

現在はその時ほどには生き生きさもなくなり、再び「管理社会」の鎖を感じつつ生きている。けれど、少なくとも自分は一人じやない、そんな気がしている。すばらしい機会を提供してくれたセミナー・ハウスに心から感謝したい。

●現代社会解明の手がかりを与えられて

立教大学文学部教育学科二年 三浦 伸也

私がこのセミナーに参加したのは、自分の興味の対象であるアイデンティティの問題と管理社会が密接な関係をもっていると考えたからである。

私は、山本哲士先生のセクションで「時間の管理化」というテーマで管理社会を考えた。管理社会における時間を、山本先生は明確な形で私たちに示して下さった。私は事前に、テキストとして指定されていたミヒヤエル・エンデの誠実に接すればいい。「このため」学ぶのではなく、自分自身に「よって」、他者「世界」とともに「学ぶ」。そんな楽しさ、敵しさは、一時でもいいのだと思う。その緊張関係(テンション)が、さわやかだ。

大学も学校化され、また、灰色の男たち・女たちがとりまきはじめているとき、大学の関連なよきを、セミナー・ハウスがうまうまく受けとめ、大学離れしながら、コンビリアルに生きつづけていくのを願ってやまない。

『モモ』を初めて読み、これほど時間を端的・明白に示した書物はないのではないかと感動した。

セミナーの運営は、学生の間発性・主体性が尊重され、三日間という時間の制約を除けば最小限の管理であった。わずか三日間ではあったが、日頃、大学では得られないものが八王子にはあった。寝食を共にするということは人間のコミュニケーションにとって必要不可欠なことだと思つづく感じさせられた。

私は、これだけ多くの人たちが管理社会について考えているのだということに、一瞬安心するとともに、就職を目前にした四年生の参加者が多いのにも驚いた。管理社会の中に組み込まれていこうとする人間が必死に自分を保っている姿が印象的であった。

昨今、われわれ大学生に向けられる非難の数々もここでは何の力ももっていない。やはり、このことは、このセミナーの特色である自主性・主体性などと関係して考えるのである。こういうことを考えるので、この大学セミナー・ハウスが本当の意味で現代社会を考えていく「手がかり・きっかけ」を示してくれるものだということがよくわかった。

最後に『モモ』の中で私が最も気に入っている一節を記して終わりたい。

「なぜなら、時間とはすなわち生活だからです。そして人間の生きる生活は、その人の心の中にあるからです」。

法人ニュース
専務理事に
西田亀久夫氏が就任

第58回理事会・第39回評議員会にて、西田亀久夫氏が専務理事に推挙され、4月1日付で就任した。



新任のご挨拶
西田亀久夫

4月1日、前任の吉川氏から事務引継ぎを受け、11日から着任いたしました。
大学セミナー・ハウスとの御縁は、二十数年前、創設者の飯田さんが文部省に相談にいられたころ、担当の大学局学生課長だったことです。

実は、このセミナー・ハウスが生まれる数年前から、大学の学生関係の仕事をしている人々といっしょに、毎年、各大学からの募集した学生諸君と一週間ほどの合宿研修会を続けておりました。夏の暑さの中で若い人たちが果てしない論議を続けた軽井沢、御殿場、北海道の教日間は、いまでも懐しく思い出されます。自分では、今日のセミナー活動のハシリだったと自負しています。

それから二〇年以上の歳月が流れましたが、学生の問題は永遠の課題として、新しく取り組みたいと思っております。

西田専務理事のプロフィール

学習院大学長 木下是雄
この4月に、西田亀久夫君がセミナー・ハウスの専務理事に新任された。

同君は東大理学部物理学科における私の同級生で、日本が太平洋戦争に突入した年、昭和16年の春にいっしょに卒業した。学生時代の彼はガッチリと厚みのある重量級のからだの持主で、精気に満ち、時として談論風発、夜半に至ることもあった。

卒業後、二年現役海軍技術科士官として呉工廠砲煩実験部で火工兵器に関する仕事を担当し、その関係で広島島の原爆の調査を担当させられたため、昭和21年になってようやく復員した。いったん東大物理教室に帰ったが、朝鮮から引揚げた家族の生計を支えるために断念し、京都の出版社で働いた。この会社は左前になって社長が逃げ出し、結局、西田君があと始末をしたという。

その後、一時、大阪学芸大学で物理の教鞭をとったが、招く人があって文部省に入り、ここで彼の針路が大きく変わった。文部省における活動として特記すべきものは、昭和27年から一〇年間、大学局学生課長として荒れ狂う学生運動に対処したこと、40年から46年にかけて大臣官房審議官として「中教審四六年答申」の取りまとめに当たったことであろう。そのころ私は、一日、審議官の室に彼を訪れたが、往年とは一味ちがう物静かな應對に彼の苦勞の年輪を見

る思いがしたのをおぼえている。46年以後は、ユネスコ国内委員、会事務総長をつとめたり、放送大学の創設準備に参画したりしたが、54年に現役に復帰して木更津工業高等専門学校校長になり、今春まで六年つとめあげた。

第58回理事会
第39回評議員会

85年3月19日/銀行倶楽部

〔出席者〕

△理事▽中川秀泰、三宅彰、鈴木皇、崎田直次、飯田宗一郎、吉川孔敏

△評議員▽川原栄峰、小谷正雄、岡宏子、井出源四郎、鈴木幸寿、隅谷三喜男

△顧問▽斎藤鎮男

委任状による者、理事一四名、評議員七五名 (敬称略)

理事會・評議員会合同会議のため、中川理事長が議長となり審議が進められた。議案はそれぞれ吉川専務理事より詳細な説明があり、すべて承認可決された。

▼役員人事に関する件

職務の異動により退任される理事二名の他、かねてから健康上の理由で辞意表明のあった吉川専務理事に代わり、木更津工業高等専門学校校長・西田亀久夫氏を後任に推挙したい旨の理事長提案。

▼昭和60年度事業計画・収支予算案について

この要件については、昭和59年度決算報告とともに本紙次号に掲載する。

予算編成に当たって会員校会費・利用料金等とも据え置きとし、事業収入では利用者延人員を59年度実績の二、〇〇〇人増の五万五、〇〇〇人、利用率五七％を目標とした旨の議案説明がなされた。

▼開館20周年記念事業に関する件

募金目標額・五億円は諸般の情勢より三億五、〇〇〇万円に減額し、自助努力として自己資金・五、〇〇〇万円を拠出し、この中に10周年記念募金の残存額三、〇〇〇万円を加算する旨の理事長提案。

次に、昭和59年度プログラムの実施報告が、担当の運営委員により以下の順序でなされた。
(一)第6回国際フォーラム「G・オIウエルの『一九八四年』とロンドン・タイムズ」(三輪副委員長)、
(二)第11回国際学生セミナー「発展と平和のモデルを求めて——科学技術と伝統社会」(山沢、長谷川両委員)、
(三)第5回国際フォーラム「科学の文化性を考える」(阿部委員)。

とくに(二)については、企画の特色・成功要因として、各セクションを大学人と企業の現場の人とのペアで担当したこと、留学生が自発的に発言し、活発な討論がなされたこと等の指摘があり、これを受けた開催期日、理科系テーマの設定の評価、学生の参加を促す動機づけの工夫等々をめぐり活発な意見の交換がなされた。

引き続き昭和60年度プログラムについての協議に入り、以下のように決定をみた。

(一)第12回国際学生セミナー開催期日…11月29日～12月1日

運営委員…広野、阿部、菊地、佐々木、中村、熊田の六氏

テーマは「発展と平和のモデルを求めて」の最終回に当たり、20周年記念企画の意味をもたせる。副題に「留学体験とは何か」など、異文化接触の問題を取り上げる。

(二)国際フォーラム

昭和59年度に二回のフォーラムを実施したこと、60年度は20周年記念の各種企画が実施される、という二つの理由で、とくに予定しない。

宇佐美滋 東京外国語大学教授

雨宮 忠 文部省留学生課長

小松諄悦 国際交流基金受入課

昭和59年度教育プログラム白書

昭和59年度は、表1のとおり大学共同セミナー(四回)、大学院共同セミナー(一回)、大学合同セミナー(一回)、国際学生セミナー(一回)、大学教員懇談会(一回)、国際フォーラム(一回)を実施した。

総合計一回が当ハウスの開催した教育プログラムの全容であり、これらの企画に当たる共同セミナー委員会、国際プログラム委員会、大学教員懇談会企画委員会のご尽力と、指導教授の方々のご協力に、改めて感謝の意を表したい。

また本年度は国庫補助金の減額もあって、大学共同セミナーの実施回数が五回から四回に減少したが、一方で、外国人ゲストの来日をとらえて国際フォーラムが二回実施されるなど、特色ある各種のプログラムが展開された。

また本年度は国庫補助金の減額もあって、大学共同セミナーの実施回数が五回から四回に減少したが、一方で、外国人ゲストの来日をとらえて国際フォーラムが二回実施されるなど、特色ある各種のプログラムが展開された。

また、専攻分野は表2-②のとおりであるが、従来になく高い比率を占める自然科学系の一七・九%は、表1の主題に示すように、第130回大学共同セミナー、第5回大学院共同セミナー、第11回国際学生セミナーで「科学」に比重を置いた企画がたてられたことによるものである。

さらに、表2-③で学年分布をみると三年生が全体の三割を占め、一、二年生の合計はわずかに七一名で全体の一四%にすぎず、高学年に集中している。表中、「その他」とあるのは研究生および社会人で、四二名中、三四名が社会人であった。社会人の参加希望は生涯教育の要請の中で増加していく傾向にあるであらうし、 Δ 知 ∇ の最新鋭で学問の方法論を検討していく「新入生」を中心とする教養課程の学生たちに切り込む工夫が必要な段階を迎えているように思われる。

次に掲げた表2-①②③は、大学教員懇談会を除いた学生対象のプログラム計七回の参加状況である。ゼミ単位の参加形態をとる大学合同セミナーと、個人参加のため、表中、大学合同セミナーの参加者を内数で()内に示した。

まず参加者総数は表2-①にみるように五〇八名を数え、前年度よりも四八名多くなっている。大学共同セミナーの実施回数の減少を考慮に入れば、学生の反響が大幅に高まった第一は、二二〇名に及ぶ応募者を数えた第128回大

次に掲げた表2-①②③は、大学教員懇談会を除いた学生対象のプログラム計七回の参加状況である。ゼミ単位の参加形態をとる大学合同セミナーと、個人参加のため、表中、大学合同セミナーの参加者を内数で()内に示した。

まず参加者総数は表2-①にみるように五〇八名を数え、前年度よりも四八名多くなっている。大学共同セミナーの実施回数の減少を考慮に入れば、学生の反響が大幅に高まった第一は、二二〇名に及ぶ応募者を数えた第128回大

〈表1〉 昭和59年度教育プログラム開催状況

回数	期間	主 題	指 導 教 授 名	参加人員
第128回 (1)	昭和59年 5月25日～27日	ことばと身ぶりの記号学	山口昌男, 井上ひさし, 前田愛, 浅田彰, 中沢新一, 佐藤信夫,*池上嘉彦	140名 (40校)
第129回 (2)	11月23日～25日	男と女 一性差の本質とその文化的意味一	岩崎寛和, 安岡章太郎, 綾部恒雄, 片倉もとこ, 亀井俊介,*杉田弘子, (青柳清孝)	52名 (27校)
第130回 (3)	12月15日～16日	科学ジャーナリズムの現実を問う	中山茂, 牧野賢治, 餌取章男, 米本昌平, 粒良文洋, 三浦賢一, 赤木昭夫, (江沢洋), (戸沼幸市)	41名 (17校)
第131回 (4)	昭和60年 3月15日～17日	管理社会のライフ・スタイルを考える	五木寛之, 山本哲士, 竹内敏晴, 室田武, 田中義久, (栗原彬)	89名 (37校)
▶大学共同セミナー				
第5回	昭和59年 6月29日～7月1日	進化論: その功罪と現代における再検討	速水格,*尾本恵市, 岸由二,*小浪充, 筑波常治, 米本昌平	40名 (16校)
▶大学院共同セミナー				
第7回	昭和59年 11月16日～18日	近代的経済・経営思想の生成 一米・英・仏・日本およびインド ネシアの事例をめぐって一	長幸男,*田村光三, 寿永欣三郎,*山下幸夫, 岡山礼子, 吉沢賢一, 原輝史	90名 (5校)
▶国際学生セミナー				
第11回	昭和59年 12月7日～9日	発展と平和のモデルを求めて 一科学技術と伝統社会一	松田武彦,*庄野克房, 高橋裕,*長谷川三千子,*山沢逸平, 桜井清彦, 菊地京子, 沢谷一夫, (熊田禎宣), (中村英夫), (溝田勉)	56名 (23校)
▶大学教員懇談会				
第21回	昭和59年 10月6日～7日	時代の変遷に伴う大学の将来像 (そのII) 一大学はこれでよいのか一	天城勲, 平木典子,*宮腰賢, (小池生夫), (絹川正吉)	62名 (35校) (運営委員, 発 題者を含む)
▶国際フォーラム				
第5回	昭和59年 7月23日～24日	科学の文化性を考える	金容雲, 中山茂, (阿部美哉)	12名 (ゲストスピーカー, 運営委員を含む)
第6回	11月8日～9日	オーウェル『1984年』とロンドン・タイムズ	サイモン・S・ブラマー, 小浪充, 高橋久志, (三輪公忠)	13名 (ゲストスピーカー, 運営委員を含む)

*印は運営委員を兼ねた指導教授 ()内は運営委員

私の大学生活とセミナー・ハウス

▼卒業に際して▲

◆私の「卒業証書」

主体的に生きる可能性へ手がかり

立教大学法学部四年 上 荏一樹

私が大学セミナー・ハウスとかかわりを持ったのは、二年のときのゼミ合宿と四年の終わりに参加した共同セミナーの二回である。

私の母校立教大学では、大学主催のキャンブというのがあり、岩手県の精薄の施設や沖繩のハンセン氏病療養所でのキャンブなど、キャンパスを離れての体験学習の機会がいろいろとあった。

不思議なもので、寝食をともにし、集中して話し合い、生活することにより、はるか昔から知り合っていたかのようになんでも話し合えるという関係ができていく。これは、立教のキャンブでもそうであったが、セミナー・ハウスで行われた共同セミナーの場合も同様であった。ここでは大学も学部も違う人々がかなりの激論をたたかわしていた。

一緒に参加した友人の一人が、帰り道で、大学のゼミ合宿しか知らない自分にとっては、このような活気あるセミナーは驚きだったというようなことを言っていた。

よく現代の若者は無気力だ無関心だという批判を耳にするが、これは必ずしも正しいとは言えないと思う。もちろん一人一人の責任もあるだろうが、それ以上に今の学校に問題がある気がする。大学の授業はマスポロ化され、キャンパスを歩いても見知らぬ顔ばかり。ゼミでさえ四〇人くらいも

いて、まるで講義のようである。自ら主体的に動くこととする、大学側の都合で様々な規制がなされる。何もせずただ与えられたように単位をとっていけば、問題なく「めでたく」卒業というコースが用意されている。卒業証書によって、無気力・無関心人間の証明がなされるというわけだ。

共同セミナーでは無気力人間証明書のような、しっかりと証書はいただけなのに、自らの力で主体的に生きていくきっかけづくりになる可能性が秘められている。

二泊や三泊のセミナーではそんなたいしたことができないわけではなく、できると、きつかけが与えられると、あとはひとりだけで歯車が動き出していく。自身の歯車がどう動いていくのか、これからは不安でもあり楽しみでもある。

◆自然探究会の誕生

東京都立立川短期大学 食物学科二年

弓削文豊子

一昨年5月、私達は学校主催の新入生歓迎セミナーで、初めてセミナー・ハウスを訪れました。所定の行事も終わり、生物学の吉田先生による散策に残った六名が、「このつるが山芋だ」と聞かされ、秋になったら山芋を掘るために再びこのハ

ウスを訪れようと、瞬間間に結成してしまっただのが「自然探究会」です。以来、秋にむけて、千葉の浅草で山芋料理を試食し、越生で山芋の掘り方の講習を受け、準備万端整えて、秋にはセミナー・ハウスで、自然探究会が自然破壊会

ウスの訪れようと、瞬間間に結成してしまっただのが「自然探究会」です。以来、秋にむけて、千葉の浅草で山芋料理を試食し、越生で山芋の掘り方の講習を受け、準備万端整えて、秋にはセミナー・ハウスで、自然探究会が自然破壊会

ウスの訪れようと、瞬間間に結成してしまっただのが「自然探究会」です。以来、秋にむけて、千葉の浅草で山芋料理を試食し、越生で山芋の掘り方の講習を受け、準備万端整えて、秋にはセミナー・ハウスで、自然探究会が自然破壊会

ウスの訪れようと、瞬間間に結成してしまっただのが「自然探究会」です。以来、秋にむけて、千葉の浅草で山芋料理を試食し、越生で山芋の掘り方の講習を受け、準備万端整えて、秋にはセミナー・ハウスで、自然探究会が自然破壊会

〈表2〉昭和59年度教育プログラム参加状況

(計7回：第128～131回大学共同セミナー、第5回大学院共同セミナー、第7回大学合同セミナー、第11回国際学生セミナー)

【② 学科別参加者数】					【① 大学別参加者数】							
	男	女	合計	比率 (%)	大学区分	男	女	合計	大学区分	男	女	合計
文学部	19	21	40	27.7	北海道		1	1	慶応義塾	20	5	25
史学部	8	2	10		東北	7	1	8	国際基督教	22(21)	1(1)	23(22)
哲学部	10	11	21		茨城		1	1	国際基督教	6	6	12
教育学部	10	25	35		筑波	17	4	21	成蹊	2	2	4
心理学部	1	3	4		埼玉	1	1	2	成蹊	4	4	8
芸術学部	3	3	6	千葉	3	3	6	成蹊	2	2	4	
その他の人文科学	12	16	28	東京	23	7	30	成蹊	2	2	4	
法学部	37	4	41	東京医科歯科	1	1	2	聖心女子		1	1	
政治学部	109	23	132	東京外国語	5	1	6	聖心女子	2	2	4	
経済学部	9	18	27	東京学芸	1	1	2	聖心女子	4	4	8	
社会学部	6	5	11	東京農工	2	1	3	聖心女子	37(26)	1	38(26)	
国際関係学部	3	17	20	東京工業	13	2	15	聖心女子	13	5	18	
その他の社会科学	33	5	38	東京女子	2	2	4	聖心女子	6	6	12	
理学部	30	2	32	お茶の水	2	2	4	聖心女子	3	1	4	
工学部	6	2	8	電気通信	11	1	12	聖心女子	2	2	4	
農学部	5	5	10	一橋	1	3	4	聖心女子	4	4	8	
医学部	3	5	8	横浜	1	1	2	聖心女子	6	6	12	
その他の自然科学			3	山梨	7	1	8	聖心女子	4	4	8	
家政学部		3	3	信州	2	1	3	聖心女子	1	1	2	
その他	31	11	42	名古屋	4	4	8	聖心女子	1	1	2	
合計	335	173	508	大阪	1	1	2	聖心女子	23(12)	3	26(12)	

【③ 学年別参加者数】				
区分	男	女	合計	比率 (%)
1	15	8	23	4.5
2	21	27	48	9.4
3	119	49	168	33.1
4	89	48	137	27.0
大学院	60	30	90	17.7
その他	31	11	42	8.3
合計	335	173	508	100.0

【① 大学別参加者数】				
大学区分	男	女	合計	比率 (%)
北海道		1	1	0.2
東北	7	1	8	1.6
茨城		1	1	0.2
筑波	17	4	21	4.1
埼玉	1	1	2	0.4
千葉	3	3	6	1.2
東京	23	7	30	5.9
東京医科歯科	1	1	2	0.4
東京外国語	5	1	6	1.2
東京学芸	1	1	2	0.4
東京農工	2	1	3	0.6
東京工業	13	2	15	3.0
東京女子	2	2	4	0.8
お茶の水	2	2	4	0.8
電気通信	11	1	12	2.4
一橋	1	3	4	0.8
横浜	1	1	2	0.4
山梨	7	1	8	1.6
信州	2	1	3	0.6
名古屋	4	4	8	1.6
大阪	1	1	2	0.4
奈良		1	1	0.2
国立小計 (22校)	102	38	140	27.8
高崎	2	1	3	0.6
東京	2	2	4	0.8
横濱		1	1	0.2
都立	3	6	9	1.8
留文				
公立小計 (4校)	7	10	17	3.4
跡見	1	3	4	0.8
国際	1	1	2	0.4
独協		1	1	0.2
山学	4	2	6	1.2
妻女		1	1	0.2
杏林	4	6	10	2.0
私立小計 (38校)	194(74)	98(1)	292(75)	58.2
東京都立	1	1	2	0.4
短期		15(15)	15(15)	3.0
明治	1	16(15)	17(15)	3.4
短期小計 (2校)				
その他	31	11	42	8.3
総合計 (66校)	335(74)	173(16)	508(90)	100.0

() は内数で大学合同セミナー参加者。総数508名のうち留学生は15名。「その他」のうち、8名が研究生、残りは社会人。

昭和59年度 業務白書

●年間利用者五万二、九三八人

昭和59年度の宿泊利用者数は、表1に示すとおり、延べ五万二、九三八人(月平均四、四一一人)、グループ数は一、二九〇(同九九)であった。年度当初の目標を下回ったが、54年度(国際セミナー館が年間稼働開始)以来六年連続五万人台を維持することができた。

なお、これにより開館以来(一九九〇九月月間)の宿泊利用者数は延べ八四万五、〇六三人、グループ数は一万八、三九四となった。

●利用者の種別、利用者の態様

表1に示すように、会員校(準

()内は前年度数

	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	比率(%)	1団体平均実人数
会 員 校	657 (693)	55.2	28,672 (29,701)	54.2	28 (28)
非 会 員 校	170 (146)	14.3	6,397 (7,254)	12.1	22 (32)
大 学 連 合	45 (55)	3.8	4,179 (5,915)	7.9	46 (49)
学 術・教 育 団 体	108 (75)	9.1	6,568 (5,284)	12.4	34 (38)
企 業・社 会 人 団 体	210 (168)	17.6	7,122 (7,316)	13.4	23 (26)
合 計	1,190(1,137)	100	52,938 (55,470)	100	27 (29)

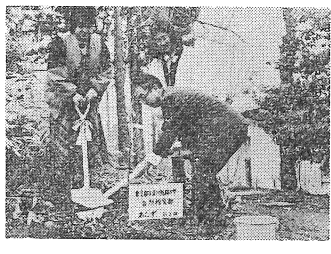
会員校を含め計六三校)の宿泊延人数は全体の五四%で、この四年連続五〇%を上回った。「大学連合」には大学共同セミナーなどハウス主催の教育プログラム、現在自主ゼミとして独立している二つの大学合同セミナーなど、会員校ないし会員校中心の連合集会が学まれているので、会員校教師が学生の利用率は実質的にはもっと高くなる。これに非会員校を加えると七四%となるが、学術教育団体にも教師・学生の参加が少なくないので、大学関係者の利用は八〇%に近づく。大学共同体にふさわしい利用形態といえるだろう。なお、表3では参考として、会員校大学五八校のうち比較的使用の多かった一五校を表示した。

大学関係の利用は、その大半が指導教授を伴った少人数のゼミ合宿である。他に学科・クラス単位の集会、学内の学際セミナー、各種課外活動の合宿研修、大学の枠をこえた全国的な研究会など多様である。新入学生を対象とするオリエンテーションや上級生との交流セミナーも各大学の努力で工夫、充実されている。本年度4~7月に実施されたフレッシュマン合宿(クラス単位以上)は二六校・四六件、延べ六、八一〇人(うち教職員六一四人)を数えた。

国際的な集会では、外国人留学生のセミナーや計七つの訪日研修グループの来泊を迎え、国際交流の場を提供することができた。

なお、宿泊日数別では、本年度も一泊と二泊のグループが計八九

「かるかん」を作り、販売しました。そして、二年後の3月、結成当時の五名を含んだ六名が卒業してゆきました。山芋を掘った思い出し、やりとげることのすばらしさ、二年間のクラブ活動は、行動力・責任を果たすことの大切さを教えてくれたものと思います。決して、スマートなクラブではなかったけれども、この二年間、最も学生らしい学生生活を送れたことを感謝しております。また、卒業に際し、美しい花を咲かせ、実をつけることのできる杏、そして山芋の上部の急に細くなった部分を俗にあんずっ首と言ふのになんで、杏の木を交友館の前に記念に植えさせていただけたいことを、とてもうれしく思っております。



都立立川短大「自然探究会」有志による記念植樹—手前は吉田幸弘教授、後方は弓削文豊子さん(中央公園)

◆忘れぬ場所 東京大学博士課程二年 田所光男

これまでの長い学生生活の中で、忘れぬ場所と言えるところがいくつかあるが、大学セミナー・ハウスもどうしてもそう呼ばざるをえない場所の一つである。ここは私にとって、二度、新しい学問世界のオリエンテーションの場となった。

はじめてここを訪れたのは、大学二年の終わり、さあこれから専門課程が始まるという時期であった。その時の一〇日間ほどのフランス語研修は、いくつかの大学の合同研修であり、原則として一切日本語は使用しないという厳しいものであった。フランス語があまり話せなかった私にはとりわけきつい研修であり、私はフランス語・フランス文化を本格的に学ぶ道のりの遠く険しいことに打ちのめされた。

しかしもちろん楽しい思い出もある。ユニット宿舎の中で、同室となった慶大生と、たどたどしいフランス語で自分の本当の問題関心を打ち明け合った時間は今なお忘れ難い。また、ハウスの自由時間になると、私は風呂に行かず毎日のように付近の丘陵を歩きまわ

った。特に裏手は、当時まだかなり山林が広がっていて、打ち沈んだ気持ちをよく慰めてもらった。

二度目にはハウスを訪れたのは、比較文学・比較文化の大学院に入学の決まった、やはり三月末のことである。比較の大学院は、例年この時期にここで合宿を行っており、他大学の先生方の特別講義・修士論文の発表・新入生の自己紹介・金素雲賞の受賞式等、多彩にプログラムが組まれている。私ははじめて参加した55年3月、比較文学・比較文化のカバーする問題領域の広がりと、先生方、先輩の潑刺とした問題意識に圧倒されて以来、毎年ここで新たな知的刺激を受けることによって、自分の研究方向と姿勢を再検討することができた。

かつてフランス語の不自由な私を慰めてくれた周囲の山林は毎年空間には小さく狭くなっていったが、私のそうした自己修正をいつも変らず支えてくれた。

この4月から私は福岡大学に赴任させていただくが、おそらく毎年この時期になると、あの山林に包まれた八王子の合宿の記憶がよみがえって、新年度の講義に取り組み私の姿勢をこれまでのように正してくれるような気がしてならない。

%と圧倒的に多かった(平均宿泊日数は一・六二泊)。また、合宿の規模では一〇〇~二九人のグループが五六%と過半数を占めた。

●年間宿舎利用率五四・九%
宿泊延人数を宿舎(収容定員二〇七人)の稼働率に換算すると年

間(本年度開館日数三五七日)の平均は五四・九%となる。表2および図1で示すとおり、ハウスの利用状況は、大学特有の事情を反映して、月によってかなり大きく変動する。年度後半には利用率が年平均を下回る月が多く、特に学

年末試験をひかえた1月は二〇%を下回った。

宿舎別の年間の稼働率をみると、国際セミナー館(六五%)、教師館(六〇%)、ユニット・ハウス(五四%)、長期セミナー館(五一%)、ゲスト・ルーム(四八%)の順である。

なお近年、生活環境の変化や他

の類似施設の充実にともない、特に学術団体や訪日研修グループ等の要求する「最低水準」がとみに高まりつつある。国際セミナー館レベルの設備と收容能力に限度があることも指摘されるようになった。ユニット・ハウス宿舎群に象徴される「非日常性」と「簡素な生活」の趣旨とこのような要請とをどのように調和させ、内外の幅

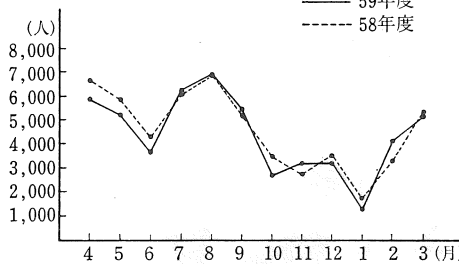
●利用者のための交歓プログラム
週末の夕食時などに行われる交歓会、季節の諸行事、地元茶道教師一門の奉任による遠来荘での茶道教室などが、大学共同の広場、独特の交流の機会として喜ばれている。外国人の訪日研修グループ

を迎えた折には、食堂や交友館で、国籍を越えた交流が自然な形で展開される。本年度は三六回のプログラムに一九九グループからの四、一八七人が参加した。

〈表2〉 月別利用状況 () 内は前年度数

月	ゼミ回数	宿泊延人数	定員比(%)
4	126 (90)	5,922 (6,830)	73.1 (84.3)
5	91 (93)	5,292 (5,910)	63.2 (70.6)
6	67 (64)	3,809 (4,239)	47.0 (52.3)
7	97 (100)	6,150 (6,070)	73.5 (72.5)
8	111 (99)	6,921 (6,959)	82.7 (83.1)
9	157 (146)	5,429 (5,134)	67.0 (63.3)
10	77 (88)	2,796 (3,564)	33.4 (42.6)
11	79 (90)	3,065 (2,892)	37.8 (35.7)
12	101 (100)	3,118 (3,508)	42.8 (48.1)
1	44 (49)	1,184 (1,818)	16.2 (24.9)
2	105 (93)	4,044 (3,278)	53.5 (41.9)
3	135 (125)	5,208 (5,268)	62.2 (62.9)
計	1,190(1,137)	52,938(55,470)	
月平均	99 (95)	4,411 (4,623)	54.9 (57.7)
1日平均	3.3 (3)	149 (155)	

〈図1〉 宿泊延人数の変動 (昭和58年~59年度)



〈表3〉 会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数	順位	校名	在籍学生100人あたりの宿泊延人数
1	東京都立	58	1	早稲田	1,665	1	東京都立	52.0
2	早稲田	54	2	早稲田	1,450	2	東京都立	49.7
3	早稲田	49	3	早稲田	1,439	3	立林塾	32.9
4	慶応義塾	31	4	慶応義塾	1,433	4	女子学院	26.9
5	慶応義塾	28	5	慶応義塾	1,036	5	女子学院	25.0
6	慶応義塾	28	6	慶応義塾	849	6	女子学院	24.1
7	慶応義塾	26	7	慶応義塾	844	7	女子学院	21.1
8	慶応義塾	24	8	慶応義塾	831	8	女子学院	17.8
9	慶応義塾	24	9	慶応義塾	770	9	女子学院	17.4
10	慶応義塾	21	10	慶応義塾	742	10	女子学院	14.4
11	慶応義塾	20	11	慶応義塾	726	11	女子学院	11.6
12	慶応義塾	19	12	慶応義塾	722	12	女子学院	9.7
13	慶応義塾	15	13	慶応義塾	710	13	女子学院	8.8
14	慶応義塾	15	14	慶応義塾	686	14	女子学院	7.8
15	慶応義塾	14	15	慶応義塾	553	15	女子学院	7.5

(注) 1.本表には準協会員校は含まない。2.本表には通信教育スクーリング学生の宿泊数は含まない。

● 事業部だより

'85年2・3月

早春の合宿研修から

本年も2月に入って早々、いかにこの丘に活気が戻った。閑散の1月末とは対照的である。学年末試験を終えた私立各大学は、入試シーズンを迎えるので、事実上

の「春休み」に。そこでゼミもサークルも学年末の合宿で一年を締めくくり、新しい学年に備える。これに3月には、大学の枠をこえての語学研修などを加え、ハウスは今年も活況のうちに「年度越し」をすることができた。ちなみに3月31日は、日曜日にもかかわらず、一グループ・二二〇名が宿泊している。

● 学年末のゼミ合宿から
この時期も「常連」グループの来泊が多い。指導教授のお名前は別掲の「利用状況」でご覧いただきたい。十数年の利用実績をもつゼミ合宿も少なくない。青山学院大経済・経営学科の羽田ゼミは、年々3月中旬に新入ゼミ生のオリエンテーションを兼ねた合宿で来泊される。'72年以降の一四年度、通算で三〇回以上の利用である。国際ビジネスに関する集中演習は今年も三泊四日。「学校でなら半

● 早春の常連集から
ゼミ合宿以外の集会には、四年目の順天堂大「新P3 (医学部進学生) クラス・セミナー」(懸田克朝元学長が講演)、一八年目の東大大学院「比較文学・比較文化」合宿セミナー(外国人研究留学生も参加)、一九年目の東工大

大学院「システム・マネジメント」セミナー(育ての親・松田武彦学長が今回も参加)など。大学の垣をこえての集会には、種生物学シンポジウム(全国各地から一〇〇名参加)、南アジア卒論発表会(会員校中心、一二年目の交流)、現象学的社会学研究会(東西十数大学の大学院生の交流)、そして二つのフランス語集中訓練(学部学生一一大学・二九名、大学院生一五大学・一八名が七ハ泊)などである。

● ささまざまな機縁から
どなたのご紹介で——? 初めての来泊者との応対の中で、個人またはグループのハウス利用に、さまざまな機縁(奇)縁のあることを発見する。大東文化大英米文学科の栗栖ゼミが卒論作成指導で三泊の合宿をされた。栗栖美知子講師は一〇年前、日本女子大学の学生として大学共同セミナーに参加しておられる。「春分の日」前夜、同窓会・研究会で来泊の「野猿の会」は、昨年共同セミナー「現代指導者論」のCセッション(岡野加穂留・明大教授、小田晋・筑波大教授)の参加者有志が解散後も定期的に開いている勉強会。今回はその初合宿である。

● 卒業生の多くが国際的な仕事で活躍中である。本号の「わたしたちの合宿」(別掲)では、羽田三郎教授に同ゼミをご紹介します。

昨年春新設された共栄学園短大の社会福祉学専攻(六五名)が2月末に二泊の合宿セミナーを実施された。教師には日本女子大社会福祉学科の卒業生が多く、今回の担当スタッフは昨年までは、一番々瀬康子教授らのもつて、同学科の新入生セミナーをお世話しておられた、おなじみの方々である。「いのちの電話」カウンセラーの

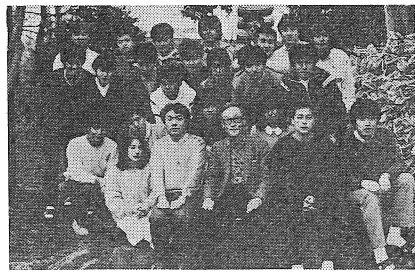
■わたしたちの合宿■

この丘から国際活動へ

一四年目の羽田ゼミ

青山学院大学教授

羽田 三郎



演習の合間に——中央が羽田教授 (交友館前庭)

失礼をお許しただいて、まず当ゼミの紹介をさせていただきます。研究分野はビジネス英語からその内容面(貿易ないし国際経営)に及ぶ実学的な学術ですが、ビジネスは自社・自国の利益のみならず、取引相手はもとより、大げさに言えば人類の平和と繁栄に貢献するように営むべきである、というのが当ゼミの理念であります。

それを歌にした自作のゼミ歌を次に紹介します。

「地球は一つ 人類に 飢え争いの あるべきや 心と心 通わせて 共に栄えん はねだゼミ」

拙いのですが、行進曲風のふしをつけて歌います。 国際交流にも力を入れておられ

る大学ゼミナー・ハウスの精神とも相通じるものがあると思えます。 合宿については、新入ゼミ生のオリエンテーションをこの丘で一四回、近年は学生の希望で夏合宿もここに決めています。

合宿のスタイルは、実はゼミナー・ハウスの簡素で機能的な設備から教えられました。ユニット・ハウスを見たとなん、新入生と上級生を一人ずつ組にして入れ、ゼミの精神を伝えるとともに、教材の徹底的予習を各組の責任として、効果をあげています。

時間割も、食事・休憩等の時間に合わせ、午前中は英語文献による国際ビジネスの勉強、午後は貿易通信に必要な英作文の演習、夜のミーティングでは上級生が卒業論文のテーマや研究概要を報告し、全員で討議します。

三泊四日の合宿で、学校で半年近くもかかる量の勉強ができます。ゆとりや親睦の要素は少ないですが、最後の夜には交友館で打ち上げもしますし、第一、このすばらしい環境と、親身にお世話下さる職員の皆様を守られて、他に何をやるよりも研修の実をあげるのが本来の姿だと思えます。

これ以上ゼミナー・ハウスに要望することは考えつきませぬ。むしろ利用させていただく側が何を貢献できるかを考えるべきで、私自身は自分のゼミの研修に利用させていただくばかりであったことを反省しています。

卒業生の多くは大なり小なり国際的な仕事に従事しており、異口同音に、この丘が自分たちの活動の原点であったと申します。

研修は、多摩地区の新ボランティア約一〇〇名を対象とする異色の合宿。これにも、ハウスにご縁の深い星野命(ICU)、鉅鹿健吉(農工大)、佐藤誠(日大)の諸先生が講師として参加しておられた。

●卒業を前にして

早春2~3月、研究の成果や苦労を分かち「卒論合宿」などで、卒業組は大学生生活最後の交流の機会を持った。在学中、数回の合宿体験を通してハウスと意味のあるかわりを深めた方々も少なくないだろう。

新入生合宿がきっかけで「自然探究会」を結成した都立立川短大の弓削文豊子さんと、一日日間のフランス語集中研修や「比較文学・比較文化」春の合宿ゼミナーでこの数年3月末に来泊の東大大学院の田所光男さんにハウス体験の感想(8~9ページに別掲)をお寄せいただいたので、ご披露したい。

●利用状況

** 11月2日回利用
** 11月3日回利用
日帰り利用を除く

2月

(105グループ、延四、〇四四人)
明星大学助教 小川 哲生
順天堂大学医学部進学生クラス・ゼミナー

中央大学教授 高柳 先男
法政大学法律学研究会学習会
明治学院大学II部サークル連合会
文化団体委員会
聖心女子大学ESSクラブ

芝浦工業大学教授	十代田知三	明治学院大学教授	橋本 敏雄
中央大学学生相談室		明治学院大学教授	筒井 正明
明治学院大学教授	三和 治	東京都立大学教授	柳沢 治
津田塾大学英语会		東京都立大学エンカウンター・グループ	
中央大学教授	池田 正孝	中央大学教授	長内 了
武蔵工業大学体育会指導者養成講習会		東京都立大学教授	赤木須留喜
駒沢大学助教	瀬戸岡 紘	慶応義塾大学教授	高橋潤二郎
東京電機大学自動制御研究部		武蔵大学教授	西川 治
慶応義塾大学教授	山岸 健	高千穂商科大助教	武内 清
駒沢大学教授	古庄 正	和光大学教授	白水 繁彦
産業能率短期大学リーダーズ・トレーニング		横浜商科大学助教	坂本 清
中央大学教授	小島 武司	産業能率大学助教	平野 文彦
明治大学学生保険委員会		東洋大学教授	山田 善靖
中央大学講師	柴 宜弘	女子聖学院短大チャーチ・クリスチャン・フェローシップ	松本 恒之
法政大学ユースホステル研究会		女子聖学院短大聖歌隊	
日本大学助教	遠藤 邦彦	都留文科大学講師	山口 和孝
明治学院大学助教	井上 泰山	共栄学園短大社会福祉学専攻特別プログラム合宿ゼミナー	
明治大学講師	林 義勝	神奈川県立弥栄高等学校	
中央大学II部学生自治会		種生物学研究会	
武蔵工業大学助教	俵 信彦	国際基督教学生協会	
東京都立大学遺伝ゼミ		中央大学学生部(受験生宿泊)	
明治大学講師	結城 英雄	都高教7支部青年部	
明治大学教授	池上 秋彦	万国ローア・パブテスト福音伝道協会	
明治学院大学人形劇団ZOO		弓町本郷教会壮年会	
早稲田大学国際学生友好会		弓町本郷教会学生会校	
明治大学教授	牧野 誠一	アストン会	
青山学院大学教授	寺東 寛治	ロシアとアジア交渉史研究会	
武蔵大学講師	増田 実	日本山岳協会	
明治大学教授	原 正彦	歴史教育者協議会	
中央大学講師	山本 武利	富士電機*	
法政大学教授	五味 健吉	日本データゼネラル	
武蔵工業大学体育会連合会リーダーズキャンプ		精琴堂楽器店	
工学院大学教職員研修会		東京都三多摩勤労者山岳連盟	
成蹊大学管弦楽団		酒井薬品**	
東京都立大学教授	金子ハルオ		
早稲田大学教授	新澤 雄一		
学習院大学シェイクスピア劇研究会			
工学院大学助教	加藤 尚武		

アイワールド*
 東京電力
 昭和飛行機工業
 興亜火災海上保険
 日本電気コストコンサルティン
 グ**

子どもの本普及協会
 ジャスコ
 オリエント時計
 京王百貨店
 日本フーズサービスチェーン協会
 日本電気

東京都高齢者事業団
 (個人利用)
 東京大学大学院生
 東京都立大学助手
 日本リフト

松本 高志
 波多野憲男
 金井ハツエ

横浜国立大学体育系サークル指導者セミナー
 慶応義塾大学英語会
 中央大学助教
 東京学芸大学KITC
 慶応義塾大学スピーチ研究会
 東京理科大学教授

北 彰
 狩野 紀昭

予 告

▼開館20周年記念・第133回大学共
 同セミナー

主題 情報化と社会
 期日 10月25〜27日

Ⅰ 全体講義
 東京大学教授 竹内 啓氏
 ハンポジウム
 Ⅱ 生物社会
 東京大学助教 松本忠夫氏
 東京大学助手 長谷川真理子氏
 東京大学教授 尾本恵市氏
 人間・言語
 東京大学教授 清水博氏
 聖心女子大学助教 無藤隆氏

東京立大学教授 清水 誠
 早稲田大学教授 嶋 武彦
 早稲田大学ルポルタージュ研究会
 成蹊大学文化会委員会
 一橋大学国際関係研究会
 明治大学教授 藤 永 豊
 国際基督教大学講師 伊藤 喜栄
 国際基督教大学教授 三宅 彰
 東京都立大学教授 河村 望
 早稲田大学神祕学研究会
 法政大学国際問題研究会
 工学院大学教授 山本芳太郎
 芝浦工業大学講師 吉田 峰夫
 早稲田大学理工学部英語会
 立教大学マイコンクラブ
 立教大学学生相談所
 東京薬科大学臨床生化学教室
 東京都立大学ベルロマス研究会
 中央大学現代憲法問題研究会
 東京農工大学生協同組合
 東京大学経済勉強会
 一橋大学生協組織部
 東京工業大学イアエステ会
 東京学芸大学生活協同組合
 中央大学商学部セミナー連合
 武蔵工業大学教授 堺 孝夫

上智大学シェイクスピア・プロダクション
 東京工業大学システム・マネジメ
 ント講座
 東京学芸大学教授
 東京外国語大学教授
 中央大学教授
 早稲田大学教授
 早稲田大学教授
 慶応義塾大学教授
 早稲田大学示村・内田研究室
 立教大学物理自主ゼミナール
 法政大学教授
 法政大学講師
 成蹊大学国家試験研修センター
 上智大学助教
 学習院大シェイクスピア劇研究会
 中央大学助教
 駒沢大学教授
 東京大学助教
 東大比較文学・比較文化研究室
 東京都立大学教授 兼子 仁
 明治学院大学旅行研究会
 中央大学経済学会
 青山学院大学教授
 明治学院大学教授
 中央大学教授
 東京学芸大学教授
 青山学院大学教授
 早稲田大学講師
 慶応義塾大学助教
 学習院大学社会福祉研究会
 東京大学教授
 青山学院大学教授
 上智大学Ad-Hoc ITC
 東京電機大学学生赤十字奉仕団
 法政大学教授
 東京経済大新入生歓迎実行委員会
 日本大学教授
 東京学芸大学教育学入門ゼミ
 明星大学助教
 桜美林大学助教

宮田登氏
 岡 宏子氏
 今井賢一氏
 井関利明氏
 竹内 啓氏
 小浪 充氏

小町合照彦
 中嶋 嶺雄
 富岡 幸雄
 大槻 義彦
 時岡 弘
 石坂 巖
 相田 利雄
 稲増 龍夫
 高祖 敏明
 大村 雅彦
 寺中 良二
 山本 泰

日本ルーテル神学大手話サークル
 大東文化大学講師 栗栖美知子
 桜美林大学国際交流リーダーズキ
 ャンプ
 国学院大学教職セミナー
 国際商科大学助教 高橋 宏
 独協大学教授 宮川 淑
 専修大学教授 望月 清司
 国学院大学助教 平林 勝政
 桜美林学園教職員組合
 中央大学受験生
 MBTグループ
 都立南野高等学校徒会
 全日本学生釣魚連盟
 全日本学生フョークダンス連盟
 全関東学生商業英語連盟
 第131回大学共同セミナー
 国庫助成私大教授会関東連絡協議
 会
 野猿の会
 現象学的社会学研究会
 大学生ITCフランス語科
 大学院仏語セミナー
 昭島ロータリーアクタークラブ
 朝日カルチャーセンター
 東京多摩いのちの電話
 青門会
 原町田教会
 松沢教会
 御茶の水キリストの教会
 東京松本英語専門学校
 文教研
 京王百貨店*
 酒井薬品*
 日本タイラン
 立川スプリング
 日本電気
 千野製作所
 三菱重工業
 沖電気工業*
 中央スバル自動車*
 ヒノキ新薬

川崎電線
 小西六写真工業
 横河メディアカルシステム
 日本フーズサービスチェーン協会
 昭和飛行機工業
 日本電気コストコンサルティン
 グ*
 多摩中央信用金庫
 エンジニアリング振興協会
 雪印物産
 スーパーアルプス
 (個人利用)
 東洋大学教授*
 日本リフト*
 中央大学学生
 中央大学学生
 東京大学大学院生
 立教大学講師
 堀 光男
 金井ハツエ
 大沢 貴則
 松村 喜義
 松本 高志
 福山 清蔵

●編集後記

本号は第131回大学共同セミナーに紙面の多くをさいた。巻頭の主題解題は栗原彬先生が本紙のために書き下ろしてくださったものである。「楽しい」ということは非常に大事なことで。教育とは全く正反対の方向の、八共にも、共に変わる経験の根本です」という氏の閉講の辞に、三日間のセミナーは集約されていたように思われた。

講師の一人、山本哲士氏が後日寄せて下さった「体験記」は、ハウスの持つ環境・装置の可能性を描き出した「Ode to the Seminar House」であろう。

なお、「わたしたちの合宿」の羽田三郎青学大教授、「卒業に際して」の上埜、弓削、田所さんらの「Ode」で本号の紙面とともに飾ることができたことを感謝もって記しておきたい (能)